

## エチオピア支援視察報告

- 日本人女性として初めて、イルガチェフェを訪問 -

2006年1月27日～2月11日、津田久美子（HAT代表）・越智明子（同理事）がエチオピアを訪問し、現地の視察・調査を行いました。特に高品質・有機栽培のモカコーヒーを生産している「イルガチェフェ」に、日本人女性として初めて訪問。コーヒーの生産過程の見学や農民との交流を通し、着実に支援の第一歩を踏み出しました。




また、同国で活動しているNGOの活動現場を訪問し、状況把握また意見交換など、今後のHATの活動を進めていく上で、大変有益な体験となりました。

### 【アディス市内】

#### ○アディス市の中心部。

市内中心部は他の地域と比べてかなり近代化されていて、現在は建築ラッシュ。

3年前の訪問時には通りにはゴミが散乱していたが、現在は地区毎に清掃班が置かれ、ゴミも殆ど見られなかった。しかし、市街地に出ると砂漠化が進み、乾いた大地で細々と農作業を営んでいる貧しい暮らしは変わっていない。車を止めると何処からともなく子供達が集まって来て、物乞いの手を伸ばしてくる。

<p>エチオピア連邦民主共和国の地図 (同国大使館 HP より) <a href="http://www.ethiopia-emb.or.jp">http://www.ethiopia-emb.or.jp</a></p> 	<p>発展するアディス市内</p> 	<p>建設ラッシュのアディス市内</p> 
<p>結婚式に出会いました。</p> 	<p>家畜が道路を横切り、車が止まります。</p> 	<p>賑やかな通り</p> 
<p>市街地風景</p> 	<p>農村地帯風景</p> 	<p>農民が住むハット（藁葺きの丸い家）</p> 

【コーヒー豆選別工場の見学】(1月31日)

○アディス市内にあるコーヒー生豆倉庫および選別工場を見学。

入口近くの倉庫内には、沢山のコーヒー袋が背丈以上に積み上げられている。これらの豆は隣接する選別工場に運ばれ、大型選別機により数段階のランクに分別される。そして、その後さらにベルトコンベアの前の女性達の手により不良豆の排除など、最終チェックが丁寧になされている。

○カップテイスト

同じシダモ G2 でも異なる地域から集められた豆のカップテイストが慎重に行われる。テイスト用に浅焼きした豆を挽いて 20 個ほどの器に分配する。そして、熟練のテイスターが、口に含んだ一瞬に、豆の持つ甘味や酸味、アロマなどを判断する。傍で見ている真剣さがひしひしと伝わってくる。最高品質のモカ・コーヒーがこうして、多くの人達の手を経て出荷されるのだ。

<p>生豆倉庫の前にて</p> 	<p>これがコーヒーの生豆ですよ。</p> 	<p>倉庫の中で作業する女性</p> 
<p>豆を選別する女性達</p> 	<p>選別後、出荷されます。</p> 	
<p>生産地域ごとに分別</p> 	<p>熟練のカップテイスター</p> 	<p>判断するテイスターの責任は重い</p> 

【NGO の活動地域を視察】(2月2日)

○エチオピア NGO の一つである「BISRAT」のテスファイ氏の案内で、ミニバス(少人数の寄合いバス)を乗り継ぎ、彼らのプロジェクト地域「イエカ・サブシティ」を訪問。

ここには路上で物乞いをしていた母子、エイズで働けない家族や孤児などを対象に、

地主や家主と交渉し、使用していない住居(大変粗末な家です)を支援者用に確保する。

マイクロファイナンス(少額貸付)や、基本的な職業訓練などを通して、自立の方途を教えている。

不登校の子供達や、生活のため学校に行けない子供達に、基礎的な教育を実施している。

「BISRAT」のメンバーは、元教員、元役人、地域有力者などで構成されているが、「今後は常駐スタッフ(月給1万円程度)を雇って活動を展開したい。また活動地域を広げていくためにも、車両(中古車でよい、但し、道がないところを走るのでオフロード用)が是非とも必要である。」と訴えていた。

都市部と地方との貧富の格差が拡大しており、離婚や死別などで働き手を失った女性達が、子供を連れて都市へ流入している。これら収入のあてのないホームレスや路上生活者などの最底辺の人たちを支援している BISRAT の地道な活動に心を打たれる。

途中ヨーロッパからの資金援助で建てられた「NGO が経営するレストラン」に立ち寄ったが、そこで働く笑顔がとても素敵な若い女性達は、NGO 教育施設の学生で、研修の一環としてレストラン運営の各分野を任せられ、生き生きと仕事をしている。

<p>プロジェクト現場にて、泥壁の家の中に入る HAT 等のボランティアメンバー</p> 	<p>施設の子供達</p> 	<p>洗濯をしている女性達</p> 
<p>野菜の売買を教わっている女性</p> 	<p>自立支援施設の前で、エチオピアと日本のボランティアのメンバー</p> 	<p>NGO 経営のレストランで</p> 

【小学校・中学校を訪問】(2月3日)

○ホテルを8時に出発。エチオピア NGO の一つ「OSHO」副代表のアベベ氏の案内で、彼らの活動現場の一つ、アルシゾーンのズワイ・ドゥグダ地域の学校訪問。

アディスから車で舗装された広い道路を3時間。そこからオフロードに出る。「オフロードに出てから、すぐですよ。」と運転手は言ったが、それから何と小1時間かかった。この間、乾燥した石だらけのところを、車体を上下に大きく揺らし埃を舞いあげながら、あえぐように進んだ。

○最初の訪問先は小学校。ただし休日で生徒は不在。泥壁で出来た粗末な5~6教室にはイスも机も無く、窓を閉めると真っ暗で廃屋のようである。

生徒達は石を持ち寄ってイスにして、膝頭を机代わりに文字を書くとの説明であった。

校庭には何もなくて埃が舞っている殺風景な有り様で、ここで数百人の子供達が勉強するということが、全く信じられない気持ちである。

○同じズワイ・ドゥグダ地域のセカンダリー・スクール(日本では高校のレベル)では生徒が待っているからと説明を受け、オフロードを更に30分。

入口の両サイドには、大勢の生徒達、教員をはじめ地元役人、父兄代表などが出迎えてくれた。

校長から学校の状況について説明を受ける。図書室や実験室などは名ばかりで実際は何も無い。置かれているイスなどは壊れているものばかり、貧しい教育環境である。

最後に校庭で臨時集会が開かれた。地元の役人、校長、父兄代表などが、学校がいかに支援を必要としているかについて次々に訴えられた。

「BISRAT」と「OSHO」の活動現場の視察を通し、エチオピアが抱える厳しい現状を目の当りにし、今後の支援の在り方について大いに参考となった。

<p>小学校(泥壁で出来た粗末な小屋)</p> 	<p>机があっても壊れている。前のほうは置き石だけ。</p> 	<p>教育施設への支援を強く要請される</p> 
<p>HAT 等の一行を大歓迎</p> 	<p>中学校(この様に机がある教室はわずか)</p> 	<p>中学校(支援を要請する校長達)</p> 